

ROOTS 400

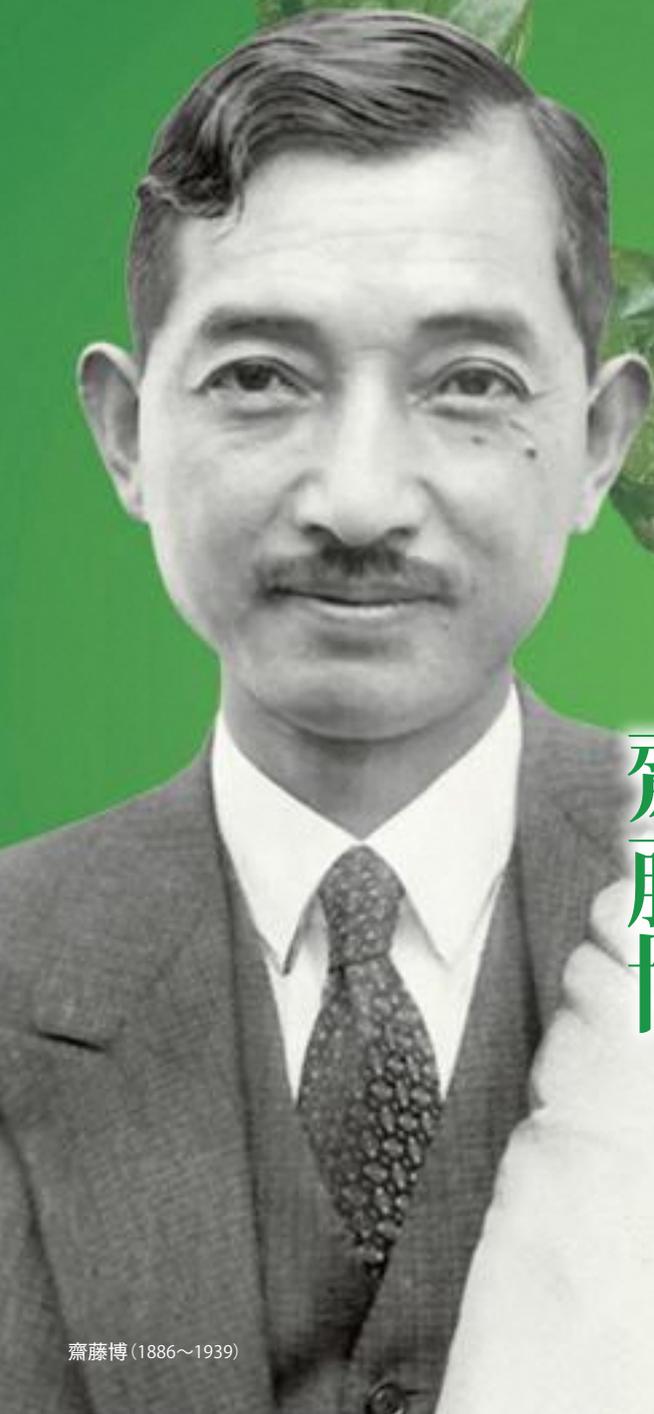
後
岡
越
長

平和と外交

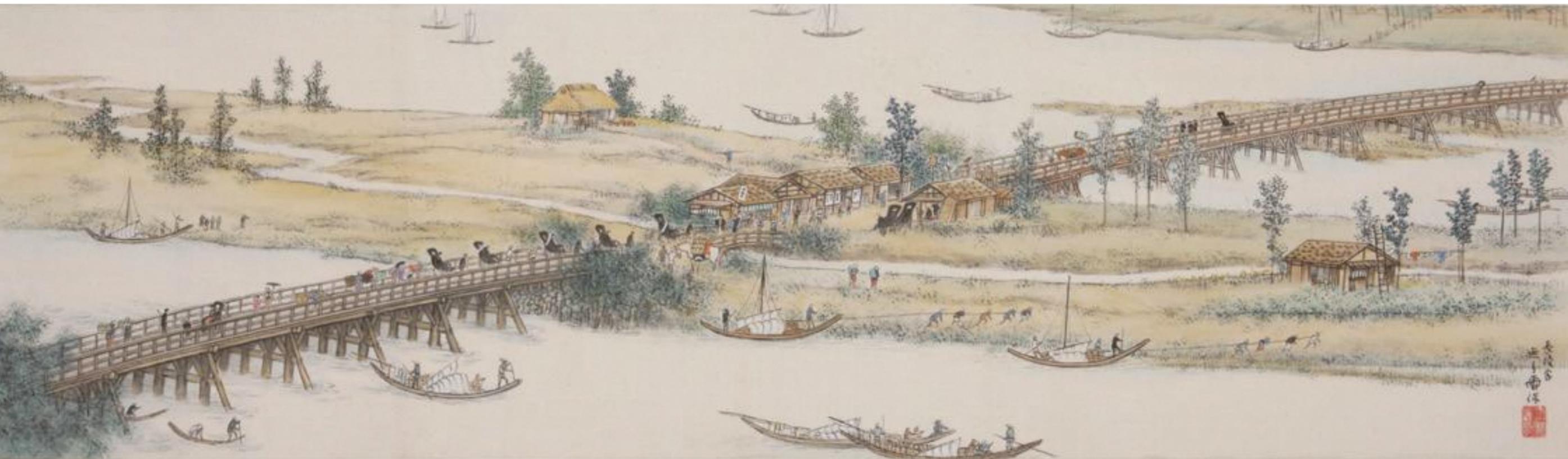
〈特集〉

山本五十六と
齋藤博

長岡藩風三百年の結晶



発刊趣旨
英語の ROOTS (ルーツ) は、樹木の根や物事の始まりを意味します。また、先人や祖先の意味も併せ持ちます。「越後長岡 ROOTS400」は、開府 400 年を迎える長岡の歴史を遡り、まちの ROOTS を探ります。



水島爾保布画「長生橋之図」

画家・水島爾保布は、明治17年(1884)に東京で生まれた。東京美術学校日本画科を卒業後、大阪朝日新聞社につとめ、「漫画」の草創期に活動。戦時中に新潟県へ疎開。戦後は長岡市に暮らした。昭和33年(1958)に亡くなるまで、「昔の長岡十二ヶ月」など、人物・風景をテーマにした作品を数多く残す。「長生橋之図」は、寄寓する旧家があった信濃川左岸からみた構図である。明治9年に落成した長生橋が、昭和12年に鉄橋となる以前、中州を挟む2本であった頃の長生橋を描く。人力車、茶屋、川船など、大河・信濃川を現代に至るまで結ぶ、長生橋の往時を活写する。

表紙



齋藤博
(さいとう・ひろし)
1886~1939

外交官、特命全権アメリカ大使。東京帝国大学法学科に学ぶ。齋藤家は旧長岡藩士の家柄で、父は明治維新後に英語教師、外務省の翻訳官をつとめた。大正7年(1918)、ロンドンの日本大使館に赴任し、通訳としてパリ講和会議、ワシントン会議などに出席。昭和4年(1929)、外務省情報部長となり、翌年のロンドン海軍軍縮会議に山本五十六らとともに出席した。平和外交の推進を唱えるが、ワシントンで病死した。



山本五十六
(やまもと・いそろく)
1884~1943

海軍大将、連合艦隊司令長官、戦死後に元帥。旧長岡藩士・高野貞吉の六男として生まれ、長岡中学校、海軍兵学校に学ぶ。大正5年(1916)に旧長岡藩家老・山本家を継いだ。ロンドンで行われた昭和5年(1930)の海軍軍縮会議、同9年の軍縮予備交渉に外務省、海軍から派遣。平和外交の進展に尽力するが、同16年の真珠湾攻撃を指揮し、太平洋戦争の火蓋を切ることとなる。プーゲンビル島上空でアメリカ軍機に迎撃され戦死した。



月桂樹の葉を編んだ
追悼の花輪

駐米大使として、日米両国間の軋轢を解消するため、文字通り身を削った齋藤博は、昭和14年(1939)2月26日、ワシントンで客死した。葬儀は、日本大使館でしめやかにとり行われた。齋藤の死を深く悼んだルーズベルト大統領夫妻は、帛帯と花輪をとどけさせた。追悼の花輪は、現在、JR長岡駅東口近く、如是蔵博物館と、神田町の安善寺に展示されている。

明治九年(一八七六)に大河信濃川に架けられた長生橋は日本一長い木橋だった。橋を架けることは洪水に悩まされ、渡船を生命がけでする長岡人の夢であった。洪水がひとたび起れば、苦勞して作った橋は流されるかもしれない。そのリスクを覚悟し、架橋を決断した先人たちの偉大な冒険。長生橋架橋によってもたらされた恩恵は戊辰戦争による負の遺産の解消のひとつとなった。大河によって隔てられた異文化が橋によって交わる。それはまた人類の平和を創るのにひとしい。平成三十年に、長岡は開府四百年を迎える。その契機に先人の知恵を学び、未来に希望の橋を架けよう。歴史の苦難を偲び決して、不幸な人びと(市民、国民、人類)をつくってはならない。今こそ期待する平和外交こそ長岡の歴史が学んだこの世の世界観そのものだと思う。

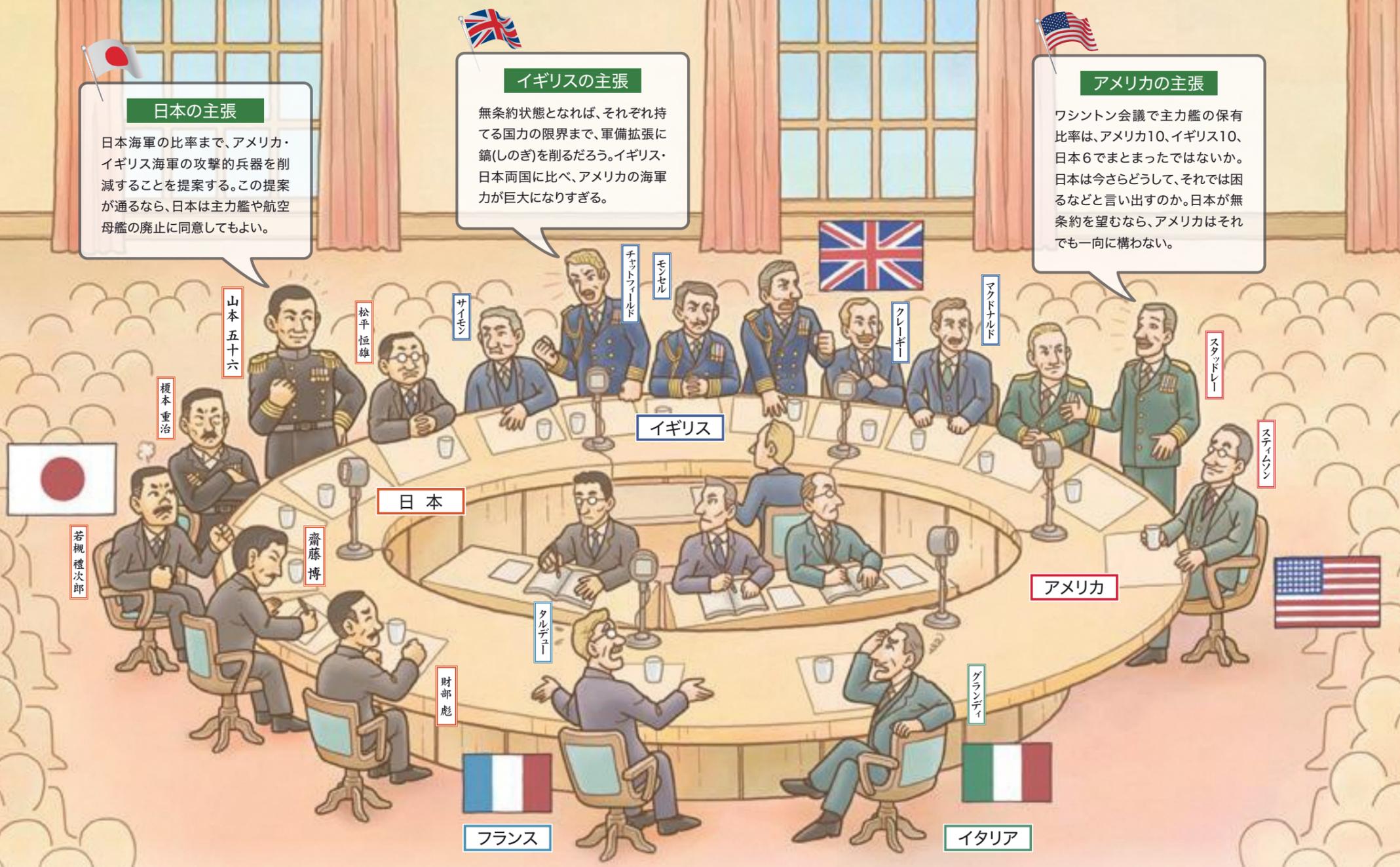
巻頭言

長岡開府四百年記念事業実行委員会 会長 磯田達伸



軍縮会議 平和の海 非戦の海

このイメージ図は昭和五年の
ロンドン海軍軍縮会議を想定したものです。
各国の主張は、昭和九年の
ロンドン軍縮予備交渉の内容です。



日本の主張
日本海軍の比率まで、アメリカ・イギリス海軍の攻撃的兵器を削減することを提案する。この提案が通るなら、日本は主力艦や航空母艦の廃止に同意してもよい。

イギリスの主張
無条約状態となれば、それぞれ持てる国力の限界まで、軍備拡張に鎭(しのぎ)を削るだろう。イギリス・日本両国に比べ、アメリカの海軍力が巨大になりすぎる。

アメリカの主張
ワシントン会議で主力艦の保有比率は、アメリカ10、イギリス10、日本6でまとまったではないか。日本は今さらどうして、それでは困るなど言い出すのか。日本が無条約を望むなら、アメリカはそれでも一向に構わない。

昭和九年（一九三四）のロンドン軍縮予備交渉に、日本海軍を代表して山本五十六が選ばれた。

この予備交渉（別の表現でいえば外交）に、山本五十六は秘するものがあつた。かつて、戊辰戦争の際、長岡藩軍事総督の河井継之助が、小千谷談判を「談笑のうち」に、平和を勝ちとる談判を決しようとした史実を例にとつて、交渉にのぞもうというものであつた。

予備交渉では、山本五十六は攻撃的武器の各国の自粛であつた。それは軍縮は世界の平和・日本の安全のために、必ず成立させようとする山本五十六の人類の恒久平和をのぞむ真実の叫びであつた。

同年、駐米大使となつた齋藤博は、迫りくる戦争を回避しようとアメリカ合衆国務省に「日米不可侵条約」の締結を精力的に説いた。

齋藤は、ワシントン、ロンドンでの軍縮会議の随員として、山本五十六とともに（戦争はしてはならないとする）世界の平和を説く一人であつた。

二人の交渉は、ときには、我が国の高官に厳しく、各国に鋭いものであつたという。

二人の思いは二度と再び故郷を焼土にしてはいけないというものであつた。

だが、齋藤博は、外務大臣の椅子を前にして病に倒れ、山本五十六は、心外な方向へ運命の舵をとられてしまった。

軍縮会議の成功、平和の海、非戦の海の平和外交こそ、二人の念願であつた。

第一次世界大戦後、戦勝国のアメリカ、イギリス、日本、イタリア、フランスなどの各国は、強い海軍を創るため、軍備拡張計画を実施しようとした。ところが、戦後、俄かに世界経済は緊縮し、世界恐慌が、各国の経済を揺るがした。

まず軍縮を提案したのは、イギリス海軍である。大正期から昭和初期にかけて、日本の経済は極端に冷え込み、国家予算の緊縮が課題だつた。一方では、軍備拡張が始まつており、軍事費のなかでも海軍費が

国家予算の五十％にせまらうとしていた。海軍内部の良識派の幹部は、国際的協調と不況を救つことを考えて、軍縮条約に参画すべきであると主張した。これらをのちに条約派という。

最初、ワシントン軍縮会議が開催され、山本五十六はその日本海軍側の随員となって渡米している。ワシントン軍縮会議は、主力艦（戦艦）の各国比率を、五・五・三で決めた。つまり、イギリス五、アメリカ五、日本三、イタリアとフランス二・六七である。ところが、日本海軍では、その比率では、日本海軍の国防戦略が成り立たないという艦隊派が出現させることになり、以後、条約派と艦隊派の角逐が始まつた。次に昭和五年の軍縮会議。昭和九年の予備交渉となつてゆく。

軍縮条約において 山本五十六

随員代表となる

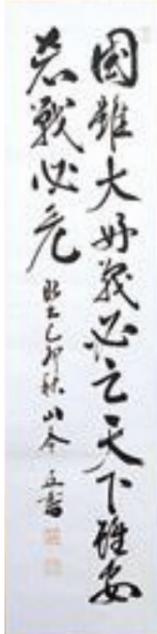
寡黙な山本五十六が、ひとたび言葉を発すると、問題の核心を衝いたという。それも、定石通りのすめ方ではなく、まったくの奇襲であったから、相手側は脱帽せざるを得ないような状況となつてゆく。まったく平凡な日本人が考えそのない構想が、海軍士官の山本五十六にはあった。そういった山本五十六の特質を見抜いた日本海軍の人事局は、山本五十六を軍縮会議の随員に選んだ。勿論、海軍少佐から中佐にかけて、アメリカのハーバード大学に語学留学をしたことも、その基礎となった。基礎といえは山本五十六は旧長岡藩儒學者の系譜を持つ長岡藩士高野家の六男であった。寛政の頃、高野家に余慶という学者がいて、藩是の常在戦場の精神の作興につとめたことも、山本五十六の人格形成に大きな影響を与えている。

ロンドン軍縮予備交渉にのぞむ

ロンドン軍縮予備交渉の席で、代表の山本五十六は、唐突に海軍軍備の全廃を主張する。それは軍縮会議そのものを否定する荒唐無稽なものとみられたが、山本五十六は案外、真面目に主張したという。山本五十六の腹中にあったのは、世界平和である。侵略を意図した戦略的兵器の全廃を企てたの発言であった。当然、会議は混乱し、収拾がつかなくなつてしまひ、結局、昭和九年の予備交渉は、あらためて開かれることを決め散会した。帰国した山本五十六を待っていたのは、日本の主権を貫いたという国民の万歳の歓迎だった。山本の労をねぎらう各界の代表や、将星に対して五十六は冷ややかに対応した。翌年、海軍大臣永野修身が、再びロンドン軍縮会議の代表となつて渡欧した際、山本は随員にと懇望されるのを断つた。まさに、軍縮会議ではない戦争勃発会議には加担したくない山本五十六の信念だった。

旧長岡藩の武士たらん

ロンドン軍縮予備交渉での山本五十六代表の外交交渉は、際立ったものだった。



司馬法仁本第一にある「国大なりといえども戦いを好めば必ず亡ぶ、天下安しといえども戦いを忘るれば必ず危し」を山本五十六が連合艦隊司令長官に就任した直後に揮毫した書。そもそも司馬法仁本は「仁を以て本となし、義を以て之を治む」とあり、民を愛すれば戦いをしないものだと言っている。だが、この書を所有していた元船橋市長の故大橋和夫氏は「忘」を「若し」とも見えるように書いた山本五十六の心境を思つて、そこには「日米非戦の心」があったとしている。

当時、圧倒的軍事力を誇るイギリスとアメリカは、日本海軍の軍艦保有率を下げようというものであったが、その大國の論理に敢然と立ち向かったのだ。会議は原則として、日英、英米、米日というふうな二国間交渉ですすめられた。日本側は山本五十六と松平恒雄駐英大使、イギリス側はマクドナルド首相、サイモン外相、モンセル海相、チャットフィールド軍令部長、クレイギー外務参事官など。アメリカ側はノーマン・ドレイビス大使とスタッドレー軍令部長などであった。山本

五十六は始め少将であったが、会議の途中に中将となっている。それでも各国代表に比べると地位は低かった。しかし、五十六は持ち前の英語知識を秘して問題を直視、直言し、理知的に説明したので、各国代表に好感を持たれたという。日本政府の思惑は、軍縮条約の撤廃という結果がでて構わないという訓令を、山本五十六に伝えていたという。ところが、山本は兵力の共通最大限度規定や主力艦全廃、航空母艦全廃などを提案している。また、潜水艦なども攻撃兵器に分類したり、航空機の発達も問題にしたりし、アメリカ側を抑えにかかった。アメリカは日本が無条約をのぞむならかわらないと考へた。ところが、イギリスはアメリカの海軍力が強大になることを望んでいなかった。交渉は虚々実々の駆け引きがあり、イギリスの新聞は五十六を「鋼鉄の笑(えみ)」と評したとある。

ロンドン軍縮予備交渉海軍代表として、ロンドン到着時の山本五十六

傑人の 主成分

語学の名手 一躍国際舞台へ

齋藤博の父祥三郎、祖父孝哉は長岡藩士であった。父は札幌農学校を卒業し、外務省の翻訳官となった。齋藤も父の影響をうけて、英語を学習し、外務省に入った。そこには合理的思考を醸成した藩是の常在戦場の精神があったといえよう。

第一次世界大戦後のパリ講和会議で、若手外務省官僚であった齋藤博が、外交交渉の重要性を説き、外務省情報部の創設に尽力している。

ワシントン軍縮会議では、齋藤博の会議録や流暢な英会話が、日本全権団の交渉を大いに助けている。以後国際会議があるたびに、どの国に赴任しようかと、齋藤が呼ばれるようになった。

この間、持ち前の社交性を發揮して、欧米の政界や、ジャーナリズムの分野に広く友人をつくっている。



シカゴで開催される日米協会の行事に参加するため、ワシントンD.C.から飛び立つ齋藤大使夫妻。(1935)

外交工作の稀才 ロンドン軍縮会議へ

四十三歳のとき、三人目の外務省情報部長となった。昭和五年のロンドン軍縮会議では、日本全権団外交部長、若槻禮次郎首席全権の通訳として会議に臨んでいる。交渉は難航をきわめ、精根尽き果てた若槻禮次郎は、齋藤博を連れてアメリカ首席全権スティムソン國務長官を訪ねた。日米両全権が対峙し、忌憚なく話し合うなかから、ひとつの妥協案が浮上する。

この妥協案をもつて、齋藤はイギリス側との調整に乗り出す。交渉相手はイギリス首席全権マクドナルド首相を補佐するクレイギー局長。後の駐日イギリス大使である。齋藤らのこうした努力によって日本は補助艦保有率一・九七五割、目標の七割をほぼ確保できる見通しが立った。ところが

海軍の随員がこれに鋭く反論する。わけでも山本五十六、山口多聞の二人が激しく反対している。

日本全権内での対立は残つたが、若槻首席全権が日本政府の裁可を得て調印に踏み切った。後にこれが禍根を残すことになる。



昭和9年(1934)、日本滞在中にお盆にあわせて長岡をおとずれた齋藤大使。



齋藤博

外交交渉において



昭和4年(1929)12月、ロンドン軍縮会議に向けて、首相官邸で開かれた会議。左から2人目が山本五十六海軍少将、右から6人目が齋藤博外務省情報部長。長岡出身の2人が外交交渉にあたった。(『新生日本外交百年史』より)

山本五十六の 三国同盟反対

武士の子は武士になる

山本五十六が生まれた旧長岡藩士高野家は禄高百二十石の侍の家であった。儒学者の家系である。同時に槍術師範も、兵学書の著述を先祖の高野栄軒、余慶が行っている。

それに寛政の頃（七八九〜一八〇二）、家老山本老迂（ろうきゆう）とともに、藩風の「常在戦場の精神」の作興につとめている。その

高野家の血統を引く五十六が、長岡藩中興の名宰相山本家（千三百石）の名跡を嗣いだことは、海軍次官就任（一九三六〜一九三九）とともに大きな意味を持つことになる。

先祖の高野余慶は常在戦場の精神を、孫子の兵法にいう「百戦百勝は善なるものにあらず、戦わずして、人の兵を屈するは、善の善なるものなり」に変えた。



山本五十六と堀悌吉。同じ海軍兵学校第32期。

山本五十六海軍次官が、三国軍事同盟（日本、ドイツ、イタリヤ）の締結に反対した理由は、当時の外交、政治問題である日中戦争や、欧州に戦乱が起りそうな気配、日本の経済の自立等を考えてのものだった。そこに

は、かつて幕藩時代に、小藩の長岡藩が大藩と戦った苦難の体験があったのだ。

山本五十六はともに三国同盟の反対を主張した海軍大臣の米内光政や軍務局長の井上成美などに比べると、いかにも古武士的風貌を持っている。同じ反対者であるが、何故か土臭いのである。

その土臭さは、律義で弱き者を慈しむ愛情にあった。領民（兵）を失うことを嫌った長岡武士の気概にあったのだ。

だからこそ、山本五十六は外交に平和の望みを託したのである。

太平洋戦争の戦機が高まった昭和十六年（一九四一）十一月十三日、山口県岩国で軍関係者の打ち合わせが行われたが、連合艦隊司令長官の山本五十六は、会合が終わると海軍幹部を集め、「対米交渉が成立したら、出動部隊の引揚げ」を命じている。

その際、引揚げの異論をとこなえた者に對し「百年兵を養うは、国家の平和を守護せんが為めである」と一喝したという。

親友、堀悌吉が

「この人去って、再びこの人なし」

昭和十八年（一九四三）四月十八日、プーゲンビル島で戦死。同年六月五日、国葬ののち遺骨の一部が郷里長岡に帰還。長岡市民は駅頭いたるところの町の通りに出迎えて、長岡の英雄の死を悼んだ。

非戦の原点

アメリカ人の心をつかみ 日本人の未来を救うために

幻の日米不可侵条約

昭和九年（一九三四）二月、駐米特命全権大使としてワシントンに赴く齋藤博の胸中には秘策があった。海軍大国である日米二国間で太平洋に一線を画し、西は日本の、東はアメリカの優位を認めることで広大な海域の平和を維持する日米不可侵条約（日米同盟）である。

昭和六年（一九三一）の満州事変以来、中国大陸の権益をめぐって、日米関係は悪化のきざしを見せていた。

齋藤は、着任早々大胆な行動に打って出る。アメリカ国務省の外交ルートを跳び越し、昼夜公私の機会をとらえ、かねて懇意のハル國務長官やルーズベルト大統領と、非公式の会談を重ねる。率直、自由な会談で、米国トップの腹のなかを探ろうというのである。日本では、山本五十六をはじめ海軍の条約派が、この同盟案を強く支持していた。

齋藤苦心の日米交渉がほぼまとまり、

批准すべき

条約の案文がワシントンから東京に暗号で打電される。喜びに沸く駐米日本大使館によりやく返電が届く。「同盟は、時期尚早」、外務大臣広田弘毅からの訓令であった。陸軍の反対がその背景にあった。



日本大使館職員とともに。(1936)

齋藤の積み重ねた交渉の成果が、この訓電一本によって水泡に帰していく。

平和交渉の努力

駐米代理大使として、ワシントンに赴任したころ、満州事変などが始まって、日米関係は険悪となっていた。齋藤は満州事変は突発事故として、アメリカ国務省から理解してもらったが、日本軍が奉天に入城し、昭和七年一月に上海事変、次いで満州国が建国宣言をする、駐米大使となっていた齋藤博の立場はあやうくなった。そこで齋藤博は、『日本の政策と目的』と題する図

書を刊行。追いつめられた日本の実情を訴えた。しかし、この書は、アメリカ国民の反日感情をかえることには役立たなかった。

そんななかで、パネー号事件が起きた。日本とアメリカの間で齋藤大使は苦悩し、やがて病いとなった。

駐米大使を辞したのちも、交渉のためにアメリカ滞在を続けた。日米開戦の回避を画策していたのである。やがて近衛文麿首相のとき、病床に近衛から電話が入った。「病床の上で起きあがって、近衛の外務大臣になつてほしい」との懇請を断つたのである。

通話が終わった受話器を妻の美代子に渡して、「じっと下を向いていた齋藤の眼から、ぼろぼろと涙が流れていた」という。健康なら、日米開戦を回避できる外交交渉をやり遂げる自信があったのだろう。

齋藤以後に齋藤なし

昭和十四年（一九三九）二月二十六日、齋藤博は滞在先のホテルで没した。アメリカ国民は齋藤博の死を悼み、巡洋艦アストリア号で、その遺骨を日本へ送った。海軍次官の山本五十六は、出迎えるために横浜埠頭に立つて出迎えている。

同年三月三日の貴族院予算委員会で、議員の関屋貞三郎は、「齋藤君が病軀をささげて日米関係の平和外交のために尽力をしてくれたことに満腔の謝意を表すとともに、将来、大使公使となる外務省職員は、齋藤博君を忘れないで欲しい」と演説している。

真珠湾攻撃の四年前に、 あわや日米開戦？

パネー号事件

真珠湾攻撃の四年前、昭和十二年（一九三七）十二月十二日、中国の南京付近で、揚子江上のアメリカ海軍砲艦パネー号を日本海軍機が爆撃、沈没させた事件をパネー号事件と呼ぶ。

日中戦争のさなか当時の首都南京を陥落させる前日に起きたこの攻撃は、揚子江伝いに重慶に敗走する中国船を日本陸軍からの要請で出撃した日本海軍航空部隊が、同行していたパネー号など数隻のアメリカ船舶を攻撃したものだ。

これが日本軍の意図的なものなのか、日本とアメリカとの間で主張が分かれ、ニュースが報道されるとアメリカ国民の対日世論は当然に悪化した。

この重大事件の発生を知った齋藤博駐米大使は、広田弘毅外務大臣からの訓令を待たずに、自らの判断と責任でアメリカのラジオ放送を買取り、三分五二秒にわたり日本側の重大な失策であったと、沸き立つアメリカ国民に対し深く陳謝したのだ。放送のなかでは石川啄木の「働けど働けどなお我がくらし楽にならざり、じっと手を見る」という短歌を引用して、日本の貧しさと不慮の事件への理解を米国民全土に向けて流暢な英語で語りかけるように訴えた。

また、山本五十六海軍次官は、日米両軍の間でパネー号がアメリカ国旗を甲板に掲げていたのか、いなかったのかを議論しているなかで「何れにせよ日本側の誤りによって事件は起きたのだ」として、ただちに海軍としてアメリカ側に対して陳謝を行い事なきを得た。

あわや日米開戦かと思われた事件を、二人の長岡人の伝統の「ネバリ」で戦争を未然に防いだ。



アメリカ海軍砲艦パネー号

長岡藩が三百年かけて 創りだした男たち

もののふの道

長岡市悠久山にある曹洞宗寺院の堅正寺の住職橋本禪嚴和尚が、山本五十六について語っている。「突然、ひよいとあんな人物が出て来るものじゃない。長岡藩が三百年かかって、最後に作り出した人間だろう」。「ある意味では正体のつかめない、質実剛健、愛想無しで底の知れないという長岡人の典型のような男」だと評している。長岡藩三



水島爾保布画「加治川の桜」

百年の歴史があったからこそ山本五十六という人物を創り出したというのである。

満開の桜のもとで逆立ち

予備交渉決裂後、昭和十年（一九三五）二月、日本に帰国した山本五十六に待つたのは、閑職であった。軍令部出仕、海軍省出仕という曖昧な閑職は、山本五十六の胸中に日本の将来を考える余裕を与えた。

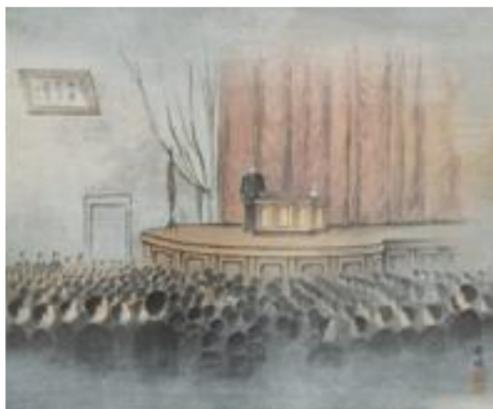
山本五十六は無然としていた。交渉で無茶な提案の説明をさせられたうえ、東京では軍縮条約推進派が次々と海軍を追われていた。海軍兵学校同期の盟友、堀悌吉軍務局長までも予備役に編入されていた。退役軍人の扱いである。山本は堀に宛てた私信で、心情を吐露している。「海軍の前途は真に寒心の至りなり」「身を殺しても海軍の為などという意気込はなくなつてしまつた」と。

帝国全権代表の肩書をきれいに脱ぎ捨てた山本五十六は、子どものように郷里の桜を楽しんだ。このころ、海軍をやめて故郷に帰り、「市民になろうと真剣に考えたという。同年四月二十日、山本五十六は加治川を舟で下る。兩岸の満開の桜の間で舟のへさきで逆立ちをしてみせた絵が残っている。

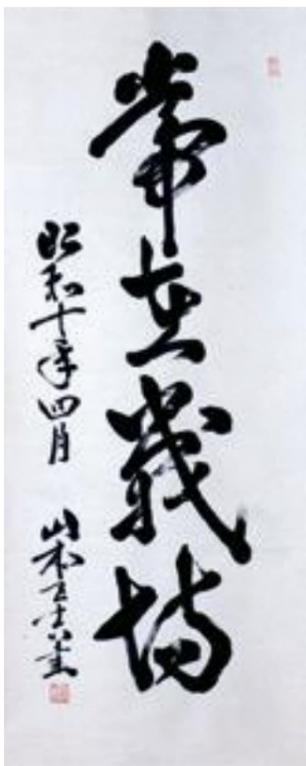
「僕が、外国勤めの閑暇をぬすんで竿をかつぎ出すというのも、孫を背に東京から長岡にやつてきた祖父さんの、釣道楽の血を流んでいるからでしょうね」

郷里長岡で再起を誓う

昭和九年（一九三四）八月、齋藤がひとり長岡駅に降り立つ。旧友反町茂作の邸まで歩く。町のそここに懐かしい思い出が残る。毎夏の遊び仲間となった東神田の子どもたち。釣道楽の祖父について行った川西在や八町沖での雑魚獲りのこと。学習院高等科の夏休み、長岡中学校からせがまれ野球部のコーチを引き受けたこと。長中のグラウンドでもう一人のコーチ、高野五十六と出会ったこと。旧友との再会と歓待、軍縮や外交問題



水島爾保布画
山本五十六は母校阪之上小学校、長岡中学校で講演「あなた方の本務である学問を静かで平らかなのびのびした心を持って（日本の）将来の発展の基礎をつくっていただきたい」と述べた。



外交で戦争回避に導く。そこにみる常在戦場の精神

昭和10年4月、山本五十六は友人の反町栄一のために「常在戦場」を揮毫する。

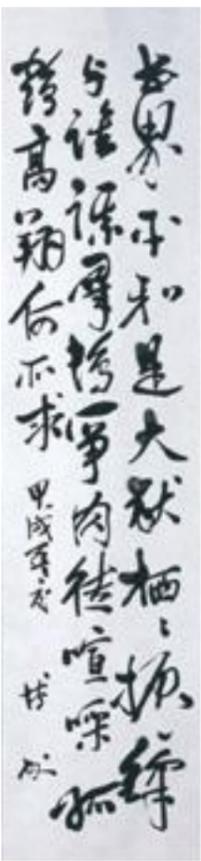
五十六を蘇らせた郷里長岡

ロンドン軍縮会議予備交渉から帰国した山本は久しぶりに帰郷し、恩師や旧友との再会。万人の聴衆を集めた平潟神社境内での講演会。テーマは「平和と軍縮」。請われて出席した青年会の会合では、若者たちを相手に夜遅くまで議論を重ねた。郷里の人びとの友情が山本を包んでいた。この年の七月、長岡中学校で同級だつ

た駒形宇太七が急逝する。海軍兵学校入りの決意を固める少年五十六の背中を「俺は生涯君を応援する」といつて押しつけてくれた親友である。このとき、堀悌吉が山本を訪ね、説得を繰り返している。「お前まで海軍を辞めたらこの国はどうなる」十二月、盟友と郷里の人びとの篤い思いにふれた山本は海軍航空本部に戻り本部長となる。

についての記者取材、市民講演会での時局演説。多忙な中、祖父の屋敷があった東神田の妙喜庵（現妙喜寺）を訪ねた齋藤が、見事な揮毫を残している。「世界平和は大きなはかり事。あたふた呼びかけ誰と謀る。鴨の群れが肉を争い大騒ぎ。鶴一羽高く翔ぶ何処求めて」日米不可侵条約の旗を高く掲げながら、

理解者もなく天空を飛翔する。自らの挫折と失意を、人知れず一編の詩に詠い込み、齋藤が外交官としての再起を誓っている。九月、東京に戻った齋藤は、ロンドンでの予備交渉に臨む山本の激励会に招かれる。すでに政府は、十年あまり、太平洋の平和を維持したワシントン条約の廃棄を決定していた。



昭和9年（1934）8月、齋藤大使が東神田の妙喜庵（妙喜寺）を訪ねたときの揮毫

世界平和は大敵
栖々振鐸与誰謀
群鴨争肉徒喧噪
孤鶴高翔何処求
甲戌盛夏博（花押）



父祥三郎を囲んで
明治38年（1905）1月 東京九段で撮影。左から長女瑠子（たまこ）、三男琢（いたる）、祖父孝哉、四男信（まこと）、二男博、二女悦子、母鶴子。



ボトマック川に隣接する入江、タイダルベイソンの岸を散策する齋藤大使と家族。奥はワシントン記念塔。（1934）写真の翌年から、入江の周辺が全米桜祭りの会場となっている。



3か月の日本滞後、ワシントンD.C.に向かう齋藤大使一家。「秩父丸」で太平洋を渡りサンフランシスコ港に到着時。（1934）左から二女正子、大使、長女祥子（さきこ）、美代子夫人。

長岡市民になったお殿様

No.2

牧野家第十七代当主牧野忠昌氏 寄稿

牧野家の歴史

牧野家の祖先が田口姓を名乗っていた時代、『源平盛衰記』巻二十三には田口家二十七代重能が源義経に味方し、義経軍を勝利に導いたと記されている。

前号でも触れたが、四国の制海権を握っていた重能親子は当時平氏一門に仕えていた。しかし、嫡子教能が義経の家来伊勢三郎義盛の計略によって捕虜となったので、父重能は四国水軍を率いて義経側に就いたとされる。

源氏方を勝利に導いた「返り忠」であったため、合戦後重能親子は捕虜となり鎌倉に送られ、田口一族は一部を除き全国に散った。

その後応永年間（二二九四～一四二八）に室町幕府四代將軍足利義持の命により地頭となった田口伝蔵左衛門成富が三河国宝飯郡中条郷牧野村（現在の豊川市牧野町）に移住して牧野姓に改め、牧野城を築いた。そして瀬木城、今橋城（現在の吉田城）、牛久保城を築き城主となった。

牛久保城以外の城は現在もその一部、土塁などが保存されている。

現代に生きる牧野ファミリィ

何年前か前、当時任んでいた逗子から東山の麓にある古刹、曹洞宗金城山洞照寺にお参りしたことがあり、長岡に転居

した秋、家内と共に再度訪れた。

このお寺の建物は九代長岡藩主牧野忠精の代に建立された。本堂の内側上部の板壁には長岡城を望む風景が描かれている。殿様の座所は一段高い上段の間になっており、東山の借景を取り入れたお庭が一望できる。静かな庭の池に張り出した木の枝先に赤トンボが羽を休めていた。

東山山麓には所々古刹が点在し、歴代藩主が領内の視察や遠乗りの折に立ち寄った場所があるので、時間を見つけて他の寺社仏閣も訪ねてみたいと思っている。



洞照寺の山門にて



人間・山本五十六を伝える

山本記念公園

山本五十六記念館

山本元帥胸像のゆくえ

昭和三十三年（一九五八）一月、戦後解散していた山本元帥景仰会が再発足した。その目的は山本記念公園の整備、生家の復元と山本元帥胸像の建立であった。霞ヶ浦航空隊の山本元帥立像は、終戦後、胸部から分断され霞ヶ浦湖底に沈められた。その後、引き上げられた胸像は長岡に運ばれ、同年十一月三日に開園した山本記念公園に設置された。しばらくして、胸像は風雪に耐えるためブロンズに鋳直され、コンクリート製の実物は昭和四十五年（一九七〇）八月、海軍の聖地江田島の教育参考館に寄贈された。



山本元帥胸像

山本長官搭乗機「翼」を長岡へ

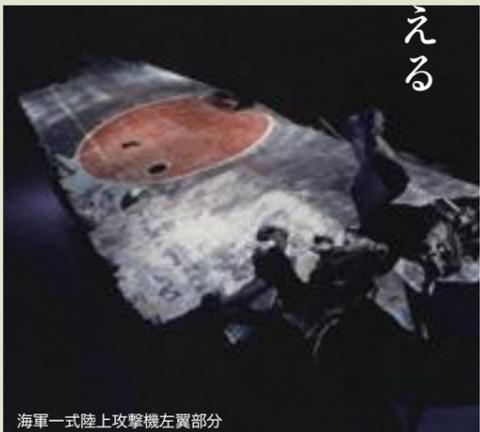
昭和五十九年（一九八四）一月、景仰会は「山本長官機」持ち帰りプロジェクトを立ち上げ、パプアニューギニア国へ「山本



山本五十六記念館
開館時間 / AM10:00 ~ PM5:00
休館日 / 年末年始
所在地 / 長岡市呉服町 1-4-1
電話 / 0258-37-8001
入館料 / 500円 (団体割引あり)
小・中学生 200円

元帥殉難地巡拝団」を派遣した。合計五回のべ三十九名のメンバーの多くはボランティアであった。また、同国の特命全権大使は長岡出身の野村忠策氏。元帥を慕う多くの人びとの情熱がプロジェクトの実現には不可欠であった。

十五年の歳月を経て、平成十一年（一九九九）四月十八日の元帥の命日に「山本五十六記念館」は開館。その中央には最期に搭乗していた「二式陸上攻撃機」の左翼部分が展示されている。



海軍一式陸上攻撃機左翼部分

互尊独尊の精神を伝える

如是蔵博物館

互尊の森にたたく知恵の蔵

長岡駅東口を北へ歩くと突如現れるミステリアスな空間。日本互尊社と刻まれた石碑が立つ、入口から中へと広がる時が止まったような静寂の森。如是蔵博物館は、日本互尊社付設の博物館として昭和十四年（一九三九）に開館した。如是蔵とは仏教で知恵の蔵を意味する。

日本互尊社は、野本互尊翁が全財産をあげて互尊思想を広めるために設立した。「独尊は互尊と知れ、互尊は独尊と覚れ」（人間はお互いに博愛を持って自主独立すべ

し）という互尊思想は、越後長岡藩の教えとともに、高い精神文化と郷土愛を育み、広い世界で活躍する人物を輩出した。博物館には、互尊翁を師事し、その考え方に共感した人びとの資料を中心に展示されている。

長岡から世界平和を考える

如是蔵博物館の所在地は、戦後区画整理されるまでは観光院町と呼ばれていた。牧野家の祈願所観光院があったことが由来である。



ホワイトハウスで行われた外交レセプションなど、公の重大な儀式の際に齋藤大使が着用した大礼服

牧野家が代々長岡藩の繁栄と平和を祈念していたこの地を、互尊翁は修養道場とし、「お互いを尊重すれば争い事はなくなる」と最期まで世界平和を訴えていた。

その教えは齋藤博、山本五十六をはじめ長岡人に確かに受け継がれていった。現在も長岡市は世界に向けて平和を発信し続けている。互尊の森と如是蔵博物館は、平和の尊さにふれるパワースポットとして、今も変わらずに訪れる人々を優しく迎え入れる。



如是蔵博物館内2階の山本五十六紹介コーナー（3階には齋藤博の資料展示）

如是蔵博物館
開館時間 / AM10:00 ~ PM4:00
休館日 / 毎週月曜日・年末年始
所在地 / 長岡市福住 1-3-8
電話 / 0258-32-1489
入館料 / 200円 (団体割引あり)
小・中学生・高校生 100円

日本互尊社は野本互尊翁が全財産をあげて互尊思想を広めるため設立した。その一隅に如是蔵博物館がある。ミステリアスな空間が突如とあらわれる不思議な体験ができる。



山本五十六の開館の祝辞
当時海軍次官だった山本五十六は開館式に出席できず、祝辞を送付している。

開府四百年のあゆみ

No.3

いまから六十六年前、焼け野原から立ち上がる長岡を
全国発信する博覧会が開催された



長岡博鳥瞰図 入口のすぐ右の「子どもの国」では飛行塔・お猿電車などが人気だった。

平和の祭典 新潟県産業博覧会

新潟県産業博覧会（通称・長岡博）は、昭和二十五年（一九五〇）七月二十日から八月三十一日まで、四十三日間の会期で開催された（主催は長岡市と新潟県）。全国の特産品を集め、科学と娯楽の粋を紹介する展示施設は、期間中に四十五万人の総入場者を集めた。会場は

神田小学校付近で、西神田町二丁目一帯。駅前広場や道路は、復興事業で整備された。会場の設定は、長岡駅と会場間を徒歩で回遊させることが目的であったのである。空襲から五年。長岡博は、復興に向け立ち上がり、恒久平和を願う市民の思いを内外に示した。



長岡博 博覧会場図
神田小学校敷地を含む西神田町2丁目地内の2万坪の会場を中心として開催され、閉会後には主要施設が学校として転用された。

大手通り
この博覧会にあわせて、焼け残った駅舎は改装された。駅前には池と噴水が新しくでき、道路はきれいに舗装された。



雪の科学館
六角形の特異な形とツララが特徴の雪の科学館は、長岡ならではの雪との関係を映像・スライドで解説した。



工業館と煙草館
工業館は工業製品の紹介と実演、煙草館は最新式の機械を設備して、煙草の製造工程を実演し即売していた。



テレビジョン館
当時はラジオの時代であり、まだ珍しいテレビを展示し毎日数回の実演が行われていた。



正面切符売り場
会期中の観客は45万人で、予想した71万人には及ばなかったが、8月3日には復興祭と重なり、多くのにぎわいをみせた。

千也がゆく

かずや

KAZUYA REPORTS

長岡藩

ゆかりの地を

巡る探訪記

第3回

会津編



若き武士の勇ましさと、惜しむ命

愛しき日々を誓った若者たちの最期となった飯盛山で、会津高校生徒による白虎隊剣舞の奉納を見ました。生徒さん達の剣舞は白虎隊士の勇猛かつ、勇ましさを見せてもらった白虎隊慰霊祭でした。

次に向かったのは長岡の方にはあまり知られていませんが、是非知って貰いたい、八十里越の後のストーリーです。戊辰戦争で新政府軍にその名を轟かせた若き武士、大隊長山本帯刀。己を犠牲にして長岡藩士四十三名を守った漢、渡辺豹吉。二人の物語がそこに眠っています。帯刀らと共に囚われた豹吉は新政府軍に懇願、「主人の死を見届け遺骸を埋めてから死を賜りたい」と申し出ます。

逆賊の遺体は放置され、『触れた者は敵とみなす』と言う非情な考えの中、豹吉は四十三名の遺骸を埋めてあげたいと、自分の身を犠牲にして主人の魂を守りました。斬首の前夜、豹吉は手に縄がかけられても口で帯刀にケツト（毛布）を掛けてあげ、会話なくとも目で今後の世の中を語っていたんだと思います。本光寺にある長岡藩士の墓を長年守ってくれているのが長岡藩士殉節顕彰会です。今では長岡の小学生の修学旅行でも行くようになり、長岡藩の生き様、会津人の愛を学ぶ地ではないでしょうか。また、山本帯刀の家の家督を後の世に継いだ者こそ、連合艦隊司令長官 山本五十六なのです。

執筆：石丸 千也（いしまる かずや）

長岡で美容室を経営し、自らスタイリストとしても活動中。長岡の歴史を通して郷土を考え、次世代に伝えたい、と熱き想いを持った若者が集う「越後RYO-MA倶楽部」の局長。「米百俵まつり」で坂本龍馬に扮している。



白虎隊剣舞
戊辰戦争で会津藩が組織した隊『白虎隊』当時16～17歳の少年達が戸ノ口原の戦いで負傷し飯盛山まで落ち延び戦火に包まれた城下を見て鶴ヶ城の落城と誤認して自刃を決行した場所として白虎隊士の墓が建ち安らかに眠っている飯盛山。



鶴ヶ城
赤瓦が特徴の難攻不落名城鶴ヶ城。天守閣に登れば会津の地を一望できます。



山本帯刀らの墓
戊辰戦争で長岡城は陥落した、八十里峠を越え会津藩と連合を組むも長岡藩士が新政府軍に囚われた。その隊士達を指揮していた者こそが大隊長山本帯刀である。捉えた新政府軍の首脳部は24歳という若さにもかかわらず、このいで立ち、気迫に圧倒され処罰するのを惜しみ、『降伏したら助命しても良いぞ』と言うも帯刀は『藩主から戦いを命じられても降伏は命じられていない』と主君への忠義を最期まで貫き通した。



会津まつり長岡藩統士隊
長岡藩統士隊の方々も毎年長岡から会津に出陣して、この地で松平容保公の助太刀に参っています。隊を率いたのは大隊長山本帯刀と軍事総督河井継之助です。この武者行列での長岡統士隊への人気度は凄まじいものです。

小学生の時、初めて行った家族旅行
衝撃だったその時から私は虜になった…
長岡と切っても切れない繋がりの地
来るたびに魅力を感じる歴史
色褪せない歴史に触れた会津若松。



飯盛山からの会津の街を見下ろすと、鶴ヶ城が見えます。また、整備された街並みの中に城下町の面影を残している。会津若松は人を魅了します。

みやじさまのニシン

菊池茶屋
長岡市宮路町1078 TEL.0258-33-7773
9:00～17:30 水曜、12月1日から3月31日までは冬季休業



下戸で、甘党で知られる山本五十六の好物のひとつに、「みやじさまのニシン」がある。宮路町にある石動神社を、地元では地名にあやかりみやじさまと呼ぶ。その境内にある菊池茶屋が参拝客に提供する茶屋鯿もまた、「みやじさまのニシン」と呼ばれている。秘伝の甘ダレで数日間、煮含めた身欠き鯿は、口の中でほろりと崩れ、昔も今

も変わらぬ味わいである。

『人間山本五十六』（反町栄一著）には、元帥から「宮路の茶屋鯿を食わしてくれ」とリクエストされ「ムシヤムシヤと鯿を十本程もうまそうに食べて下された」と記されている。なかなか豪快な食べっぷりではないか。江戸時代から北日本、特に北海道の日本海沿岸では鯿漁が盛んで、保存に便利な身欠き鯿はタンパク源として広く内地に流通した。

長岡でも、冬の栄養源には欠かせぬものがあり、長岡城の雪下ろしをする人足への報酬は、一日に付き身欠き鯿一本と茶碗酒一杯だったといわれている。ささやかな報酬だが、労働の後では、格別美味さも染みたことだろう。

慰霊の白菊

空に手向ける祈りの花火

毎年八月一日の長岡まつりの夜、笛太鼓の賑わいも引いた頃に、白い尺玉花火『白菊』が敵かに打ちあがる。それは、昭和二十年（一九四五）の米軍による長岡空襲で犠牲になった人たちへ手向けられる、慰霊の花火である。

白菊の花火は、長岡を代表する花火師・嘉瀬誠次氏が平成二年（一九九〇）に、当時ソビエト連邦のアムール川で打ち上げたことに始まる。嘉瀬氏は自身もシベリア抑留を経験しており、亡くなった戦友への万感を込めた花火だったという。その後、長岡においては空襲の日を忘れないようにと、平成十五年（二〇〇三）に八月一日の白菊の打ち上げが定まった。平成二十三年（二〇二一）には、日米開戦の引金である真珠湾攻撃実行の十二月八日夜に、米国の犠牲者に向けた慰霊の白菊が



平成27年(2015)真珠湾にて

打ち上げられ、市民有志により現在まで毎年継続されている。その白菊が、平成二十七年（二〇一五）八月十五日（日本時）に世界平和をテーマとして真珠湾で打ち上げられた。長岡市は真珠湾攻撃を指揮した山本五十六の出身地であり、一方では米軍による空襲被災地である。その歴史をふまえると、今日の姉妹都市ホルルとの協調は大変に価値が高い。白菊の花火は、私たちが今後も平和を考え続けるに貴重なメッセージを与えてくれる。

ROOTS
400 越後長岡

長岡開府400年という節目の年を契機に我々の住む地域の歴史や文化のルーツを見つめ直す
平成30年は長岡開府400年

越後長岡 ROOTS400 第3号 平和と外交 ～山本五十六と齋藤博～

次号予告/信濃川記行

発行/長岡開府400年記念事業実行委員会 平成28年12月1日
平成30年5月20日 第3刷

編集/越後長岡ROOTS400編集会議 代表 稲川明雄
石丸千也、恩田富太、星貴、渡辺千雅、長岡商工会議所、長岡市
〒940-8501 新潟県長岡市大手通1-4-10(開府400年記念事業準備室内)
Tel.0258-39-2395 Fax.0258-39-2272
E-mail: kaifu400@city.nagaoka.lg.jp

制作/株式会社ネオス
協力/山本源太郎、齋藤正子、如是蔵博物館、大橋真
新潟県立歴史博物館、長岡の歴史を伝える会、山本五十六記念館
本光寺、安善寺、長岡市立中央図書館、長岡市立中央図書館文書資料室
長岡市立科学博物館、長岡市郷土史料館